

貧困のない世界をつくるのが 世界銀行の使命

池上 七年前まで西水さんが副総裁を務めておられた「世界銀行」とは、どんな仕事をしている銀行なのでしょうか。

西水 世界銀行は、貧困のない世界をつくるための銀行です。市場から自力で資金を借りることができない発展途上国に対して、二十年から四十年という長い期間、できるだけ低いコストまたは無利子で融資して、その国の社会や経済の発展のために役立つプロジェクトに使っていただくのが使命です。

池上 国連やユニセフのように、寄付金を募って、集まった資金で基金を組み、無償で援助する機関だと思われがちですが。

西水 全く性質が異なります。ひとさまの大切なお金を市場からお借りし、運用し、融資し、きちんと回収して市場にお返しする。一般の銀行と同じく、市場原理に基づいた本物の「金融機関」です。

池上 ただ、国家リスクが高い発展途上国や貧しい国に長い期間でお金を貸すわけですから、事業リスクも高くなりますね。

西水 ですから、世界銀行の金融運営が、とことんうまくいっていないといけない。実際、ここ数十年、世界銀行は金融機関として「AAA(トリプルA)」という最高の格付けをいただいています。そうでないと、リスクの高い発展途上国にできるだけ低コストで、長期間お金を貸し付けることはできません。

池上 意外と知られていませんが、日本も世界銀行のお世話になっていますね。

「今」がわかる 経済トレンド対談

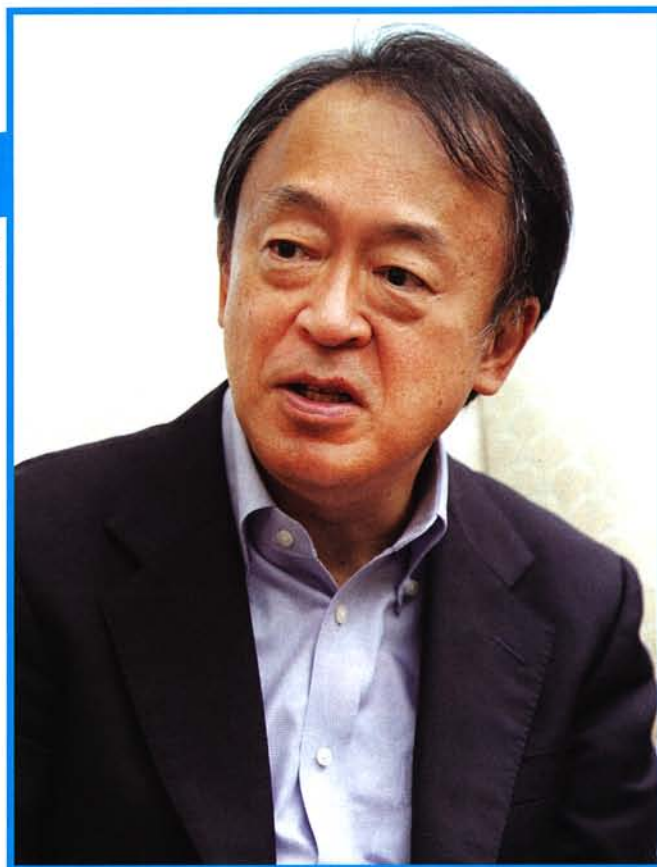
シジョンを活かす金融経済教育とは？

1997年から2003年まで、世界銀行の副総裁を務めた西水美恵子さんに、「世界から貧困をなくすのが使命」という世界銀行の仕事はどんなものか、彼女が高く評価する「いまの若者たち」ととっての金融経済教育の重要性とは何か、語ってもらった。

池上 彰

ジャーナリスト

池上 彰(いけがみ あきら)
長野県松本市出身、1950年生まれ。慶應義塾大学卒業後、1973年NHK入局。報道記者として、松江放送局、呉通信部を経て東京の報道局社会部へ。警視庁、気象庁、文部省、宮内庁などを担当。1994年より2005年3月までNHK「週刊こどもニュース」でお父さん役を務める。2005年3月にNHKを退社し、現在はフリージャーナリストとして活躍。著書に「そうだったのか! アメリカ」「そうだったのか! 現代史」「相手に「伝わる」話し方」「日銀を知れば経済がわかる」など多数。



西水 第二次世界大戦直後に誕生した世界銀行は、戦争や震災などで破壊され、自分たちの資力では復興に時間がかかりすぎる国に対して、必要な資金とノウハウを提供することも重要な使命の一つですから。

池上 首都高速道路や名神高速道路も世銀の融資でつくられた道路ですね。一九六四年に完成した東海道新幹線もそう。その世界銀行からの融資の返済が終わったのは、そんなに昔じゃなかったと思いますが。

西水 一九九〇年だったと思います。他にも、水力発電の大型ダム建設費用などの融資で、戦後の日本の電力開発を支えたのも世界銀行でした。

池上 戦後、日本が高度経済成長を実現して、復興を遂げられたのも、世界銀行のおかげと言えるわけですね。

西水 ただ助けられたわけではありません。当時の報告書には、世界銀行が「十年かかる」と予測したダムを二、三年で完成させた技術力の高さと勤勉さ、工事中に不慮の事故で亡くなられた方を悼む現場のみなさんの態度などに対して「素晴らしい文化を持つ国だ」という賞讃の言葉が頻繁に出ています。それらを読んで、私は「日本人であること」を誇りに思ったものです。

池上 長期間低コストで貸し付けを行うという点で、世界銀行は「長期信用銀行」の国際版と考えられるのでしょうか。

西水 少しニュアンスがちがいます。世界銀行の株主は、加盟国の Sovereign (ソブリン) と定められています。ソブリンは国際法の専門用語ですが、独立国家を成す意志、即ち国民という意味と考えるのが正しいのです。ですから、世界銀

行は「世界各国の国民からなる共済組合」なのです。

世界銀行にとって最も大切なのは貸すことではなく「貸さないこと」

池上 西水さんは、発展途上国に対して、具体的にどんなふうに通貸されたのですか。

西水 「どれだけ貸さないか」を大切にしました。大抵の銀行は「どれだけたくさん貸したか」が業績になります。しかし、本来は、なぜ貸さないか、その理由を説明した上で「こうすれば、貸せるようになりますよ」と相手が最善の方法に至るお手伝いをするのが、銀行マンの根本的な使命だと考えています。

池上 無制限に貸すことは、かえってその国のためにならない。ただ、相手の理解を得るのは、大変そうですね。

西水 その国の大統領や首相に対して「そんなムダな使い方には貸せない」と言うのが「政治介入する気か」と反発されました。しかし、私は「世界銀行を資金面で支えているのは、あなたではなく、国民です。その国民の意見とは異なるから、貸せません」と答えました。

池上 そこまで言うためには、西水さん自身が、その国の国民の実態や願望を把握しなければならなりませんね。

西水 発展途上国の国民のほとんどは、貧しい人たちです。そんな国民の意思は、権力者たちに、なかなか届かない。私は「透明な国民」と呼んでいましたが、そういう、見えない、聞こえない国民の意を汲み取ることが重要だと思っていました。

池上 どうやって汲み取ったんですか。

ケイザイしゃべり場

Vol.17 TALK THEME いまの若者たちのアンビ



西水美恵子

元世界銀行副総裁

西水美恵子 (にしみず みえこ)
大阪府豊中市出身、北海道美瑛市で育つ。東京都立西高等学校在学中、交換留学生として渡米し、大学に入学。1975年、プリンストン大学経済学部の助教授に就任。1980年世界銀行に入学。1992年に国際復興開発銀行リスク管理・金融政策局局長となるなど、要職を歴任する。1997年、南アジア地域副総裁に就任し、2003年に世界銀行を退職するまで務める。2007年より、シンクタンク・ソフィアバンクのシニア・パートナーとなり、現在、執筆、講演などで世界を飛び回る。

西水 最終的には「自分で体験するしかない」と思って、各担当国の貧村にホームステイしました。初めての体験はスリランカとパキスタンで、それぞれ数週間ずつ。「世界銀行の幹部」であることは忘れて、一人の村人として私を受け入れてくれるようアレンジしていただきました。あれほど貴重な経験はありませんでした。

池上 普通、銀行の幹部がわざわざそんなことしませんよ。世間一般からみるイメージとは全くちがう仕事のやり方ですね。

西水 私だけではありません。世界銀行の職員はみんな、「貧しい国の人たちのためにやりたい」という情熱を持って入ってくる。しかし、大きな組織ですから官僚的なカルチャーが避けられず、最初の情熱も徐々に薄れていく。ですから、彼らのパッションに再び火を点けるために、もっと草の根に密着した、いい銀行マン、としての仕事をしてみようために、私の下で働く条件として「貧村ホームステイ」を課しました。

池上 他の職員たちにも……ですか。

西水 私が体験したあと、直属のマネージメントチームの局長クラスを集めて「貧村ホームステイをやりたくないなら、この局から出て行け」と命じました(笑)。

池上 どうなりました。

西水 体験してもらって、一週間後に合流したら、人間が変わっていました。

池上 たった一週間で変わった？

西水 みんな、以前とは、逆さま。なくなって帰って来てくれました。

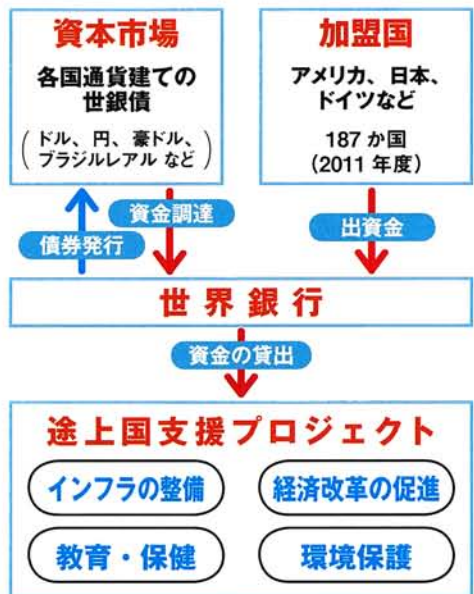
貧村ホームステイの体験が職員を、本物の銀行マンに変えた

ケーザイしゃべり場

Vol.17 TALK THEME
いまの若者たちのアンビションを活かす
金融経済教育とは？

（世界銀行の役割）

世界銀行グループは5つの組織から成るが、そのうちの国際復興開発銀行 (IBRD) と国際開発協会 (IDA) を「世界銀行」と呼ぶ。IBRD は、比較的信用力のある途上国や新興国に利子をつけて貸出を行い、IDA は最貧国向けに無利子の融資などを提供している。いずれの機関も、資金だけでなく開発に必要な技術協力や知識の提供を行い、発展途上国や新興国の安定的な成長や貧困削減を支援している。



（経済の専門家に聞く 最近の世界情勢について）

その1 今の「ギリシャ危機」についてどのように見えていますか？

「ギリシャ危機」を引き起こした要因の一つは「ユーロ共同体」のデザインをまちがえたことにあると思います。財政政策は各国個別のままにして、金融政策だけをユーロ内で統一してしまっただけです。ですから、もし将来的に財政政策も一本化する「欧州合衆国」を実現することができれば、状況はちがってくると思います。

その2 このギリシャ危機から日本が学べることは何ですか？

日本の国民は意識が高いですから、国の財政債務に何からの危機感を持っていると思います。その危機感から目をそらさず、リスクをしっかりと見極めること。根本的には政治の問題になるので、解決には時間がかかります。ですから、まずは自分の家計を見直すことが重要です。

経済や金融の仕組みを教えれば、子どもたちにも「世界」が見えて来るのですね。（池上）

池上 どんなふうに変ったのですか？

西水 たえば、次年度の予算の仕分け会議のとき、以前は「部あつて局なし、局あつて世界銀行なし、世界銀行あつてお客様なし」の状態で、予算を取り合つて喧嘩するし、無駄使いも多かった。しかし、発展途上国の家族の一員になって極貧生活を体験すると「貧しい人々、つまり、世界銀行のお客様、のことを自分は全く知らなかった」と気づかされます。

池上 その結果、どうなりましたか？

西水 一例をお話ししましょう。次世代を担う年代の女性の教育は、発展途上国の社会や経済の発展に大きく影響するので、女性の成人教育の向上には積極的に融資します。その教育を担当している局長が、予算会議で、「涙声でこう発言しました。「ホームス

テイ先の、村のお母さん」が「読み書きができないのは本当に辛い」と泣いたので「習えるように学校を建てるよ」と言ったら「でも、習う時間がない」って。

池上 学校ができては通う時間がない？

西水 南アジアの貧村の女性は、一日に平均六、七時間を水汲みに費やします。さらに家事はもちろん、薪集めや畑仕事、家畜の世話まであるので、自分の時間なんて全くない。しかし、彼はそれまで「貧しい家庭の女性は学ばないから読み書きができない」と思い込んでいたんですね。

池上 「学ばないから読み書きができない」と思い込んでいたんですね。その事実が気づいていなかった。だから、会議のとき、教育担当の局長は「女性の成人教育は本当に大切だけれど、まず水道をひ

くことから始めなければいけない。うちの予算を削ってインフラ局に回してくれ」と言い出した。すると、同じく貧村ホームステイを体験したインフラ局の局長は、自分の体験から「それも事実だけれど、水道は読み書きを教えてくれない。うちの予算を教育に回すべきだ」と反論しました。

池上 「予算の奪い合い」ではなく「譲り合い」で喧嘩し始めたわけだ。

西水 他の局も同じ体験を共有していますから、最終的には、局とか部とか関係なく「戦略的に大切な仕事に優先的に使う」という仕組みがつくられました。以前は喧嘩の仲裁役だった私が、その会議では、涙を流しながらただ見守るだけでした。「世界銀行の職員という立場からは現場の生の情報が入らない。ひとりの人間としてお客様

の中に入って、いかにいい銀行マンとしての仕事はできない」って、みんなわかってくれました。

池上 現在、韓国のサムスンが世界市場を席巻している理由と似ていますね。サムソンの社員は世界中にちらばって、何ヶ月か何年か、必ず現地生活する。そのうちのアフリカに住む社員が「懐中電灯付き携帯電話」を提案して、大ヒットさせた。日本では考えられない、付属機能。ですが、電灯のない地域ではものすごく便利なんです。大事なのは「お客様を知ること」。それを西水さんは世界銀行で実践した。なんだけ、仕事の本質、を教わった気がします。

西水 金融の仕事にたずさわる人間は、貸したお金が最終的にどういうリアルな活動のなかで動いているのか、常に知っておく

西水氏が語る
世界銀行に入った理由
～貧困との闘いを
決意した日～

エジプト・カイロでの
ナディアとの出会い

プリンストン大学の助教授だった私は、1年間のサバティカル（研究休暇）を世界銀行の研究所で過ごすことにしました。

副総裁から「一度は発展途上国の生の現場を見た方がいい」と言われたので、週末、エジプトのカイロに行きました。

都会に隣接するイスラムの墓地、貧しい人々が住みつく「死者の町」と呼ばれるスラムを歩いていくときのことでした。

女性が1歳くらいの子どもを抱え、地べたに座ってわんわん泣いていました。「この子は病気だ」と言うので「医者と呼ぶから、あなたは休みなさい」と諭し、その子を抱きとりました。空気みたいに重さがありませんでした。「ナディア」という名の女の子は、私の腕の中で息を引き取りました。

体じゅうの細胞がバラバラになったような感覚に襲われました。周囲を見回すと、夕暮れどき、立ち並ぶ高級マンションには明かりが灯り、その回りを高級乗用車が何台も行き来していました。

私は直感的に思いました。「貧富の格差を生み続ける悪い統治、貧しい人たちのことを気にもかけない為政者たちが、この子を殺したんだ!」

そのとき、私は人生の選択をしました。プリンストン大学に戻って恵まれた子どもたちに経済学を教える生活ではなく、世界銀行に残って、貧しい人々を苦しめる世界中の「貧困」と闘う道を選んだのです。

対談を終えて

発展途上国を助ける世界銀行に
本来の金融のあり方を教わった



世界銀行は国際援助団体ではなく、市場から資金を集めて融資する、れっきとした金融機関です。お話を伺って、世界銀行がきちんとした運営を続け、「トリプルA」の格付けを維持しなければならない理由は「発展途上国に低金利で長期間お金を貸して、貧しさから脱出するお手伝いをする」という使命を果たすためだとわかりました。「リーマン事件」での金融ビジネスの目的がグリード（強欲）だったことに落胆していた私たちに、改めて「本来の金融のあり方」を教えてくださいました。

「ひとや社会のために」という思いと金融経済教育を組み合わせれば、素晴らしいことが起きる気がします。（西水）

べきです。そのうえで自分の「倫理」を確認しなければ、金融という仕事はほとんど危なくなっていくと感じています。

「世のため、ひとのためにになりたい」
若者たちの思いと金融経済教育

池上 ところで、西水さんは最近の若者についてどうお考えですか。バブル崩壊後に生まれ育った最近の若者は、前の世代の若者に比べて「覇気がない」「おとなし過ぎる」という意見もあるようですが。

西水 私は、そうは思いません。日本に帰るたび、心がけて若い世代に会うようにしています。小学生、中学生、高校生、大学生、若い社会人……みんな、すごく元気があると思うんです。

西水 私が小さい頃は「世のため、人のためにになりたい」と思っても、なかなか実行に移せなかった。でも、今の若い世代は、ひとや社会のための活動には積極的で、すぐ実行に移す人も多い気がします。

池上 昔の「もっと上を目指す」「社長になる」というわかりやすい向上心ではなく、今は「世のため、ひとのためにになりたい」という思いを強く持ち始めた。

西水 そんな。前とはちがった品質のアンビション（野心）を地域や社会のために活かせるようサポートするのが、私たち大人の役目じゃないかなと思っています。

池上 日本の「教育」は、どうでしょう。

西水 日本で増え続ける所得の低い層は、二世代目に入っています。自立自立で貧しさから這い上がるには、質の高い教育を受

けるチャンスが平等であることが条件です。しかし、今の日本では、いい教育を受けたければ、お金をかけなければならぬ。そんな「教育の格差」をなくすことが日本の急務だと、私は思います。

池上 では、今の若者、たとえば中学生たちに対して、金融や経済について教えることには、どんな意味があるのでしょうか。

西水 金融や経済の教育は、とても大切だと思います。私は大学で初めて経済学を学んだとき「経済人としての自分と国との関係」をみる学問なんだ」と感動しました。

池上 「自分と国の関係をみる学問」とは、具体的には、どういうことでしょうか。

西水 経済学は、人間の欲望からくる経済行動の集約がどういうもので、それを良い方向に持って行くにはどういう政策が必要

か、整理する学問です。社会に生きる人間として、自分だけのことを考えるのではなく、地域や国のためになる経済行動の集約の仕方や、そのなかで自分はどう行動するべきかを考える……そういう観点を持たないと理解できない学問なのです。

池上 日常生活での自分の経済行動は世の中とどのような関係があるのか、自分の行動がどう世界に関わり、あるいは世界経済が自分にどう関係してくるのか、そういう経済や金融の仕組みを教えれば、子どもたちにも「世界」が見えて来るのではね。

西水 そのような教育と、今の若者たちの「ひとや社会のためにになりたい」というアンビションを組み合わせれば、近い将来、素晴らしいことが起きるのではないのでしょうか。